まえがき

カラーテレビがほぼ全所帯に普及したとされる一九七五（昭和五十）年ごろ、筆者は「水」にまつわる「不思議な話」に関心をもつようになった。工業の発展が目覚しく、日常生活が急速に豊かになり始めた時期である。筆者は当時、一技術者として工業界に身を置いていた。その立場で「水に関する諸情報」のメモを取り始め、それが紆余曲折を経て本書に至ったのである。

このメモは当初、科学、技術の分野の「水情報」が中心であったが、「水」が関わる分野はきわめて広い。やがて、メモの数が増え、パンチカードでは整理ができなくなった。

そこへ一九八五年、ワープロを入手した。加筆・修正は自在、順序の変更もきわめて簡単で、見出しに若干の工夫をすれば、すぐに探し出せる。その上、つねに清書された状態で保存・利用ができる。瞬く間に身近な文房具になり、机の回りは一変した。

「水情報」の増加はもの凄かった。やがてワープロでも整理がつかなくなってきた。いよいよ筆者にもパソコンの波が押し寄せてきた。やがて、一〇年間世話になったワープロをパソコンに替えた。整理しやすくなったので、「水情報」集めはさらに加速した。インターネット情報も加わった。

これらをパソコン内で整理していると、当然ながら「水に関する言葉」が増えてくる。それを意識して抜き出し始めた。「水」という文字のつく言葉から始まって、「氷・湯・…」、「川・湖・泉・海・…」、「雨・雪・霰・雲・露・…」、「流・液・滴・…」、「湿・蒸・冷・凍・…」、これらに、「さんずい」のつく文字、「舟・傘・笠・血・茶」のつく言葉も含めると際限がない。これらを総称して筆者は当初、「水語」とよんでいた。

この「水語」は増えた。まるで自己増殖するかのように。ところが、整理が追いつかなくなってきた。そこで、物流倉庫のように、パソコンへはバラバラに格納し、コンピューターで瞬時に取り出せるように変えた。具体的には入力を「ワード」文書から「エクセル」文書に切り替えたのである。これでたとえば五十音順配列は瞬時にできるようになった。

ところが、すぐに行き詰った。五十音順に並べ替えてみたものの、「命」がまったく感じられない。「気になる言葉」の意味を確かめるための「単なる辞典」にすぎず、インターネットで簡単に調べられる時代である。そこで「水語」に命を吹き込む方法はないものかと自問自答と試行錯誤を続けた。

格納はバラバラでもよくなったのである。そこで、「理系」の縛りを解くことにした。

とにかく「文系」の言葉を取り込んだ。ついに「文系」「理系」合わせて一万項目を超え始めた。そこで収集方法を変えた。一方的に集めるのをやめて、余計なものを外しながら集めることにした。「水語」として相応しくないもの、実質的に同等のもの、固有名詞などは、パソコン内の別の場所へ「蔵入り」させた。こうして「文系」「理系」合わせて約七千項目に絞った状態で「水語」の収集を進めながら、丸善の中村俊司さんに相談してみた。

「興味深い辞典ではあるが、単に五十音順に並べただけでは、魅力は半減」という結論だった。つまり、意味の分からない言葉を調べる普通の辞典と、知らない言葉を発見して語彙を増やすことのできる辞典という二つの役割をもった辞典ができれば、大変魅力的なものになるのではないかという提案であった。たとえば、日本語には驚くほど多くの「雨」を表す言葉があるが、それらを五十音順に配列した七千項目の見出し語の中に散りばめるのではなく、「雨」というカテゴリーでまとめて並べれば、日本語がいかに豊かな言語であるかを実感できるだけでなく、新たな「雨」の言葉に出会うことができるというアイデアであった。

そこで著者は「水語」の分類に取りかかった。まず、普通の書籍の「章・節・項」を住民台帳の「県・市・町」に、「水語」を「住人」に見立てた。「生い立ち」「性格」「時代・年齢」の異なる七千人に「町」をあてがうことにしたのである。ただし、極端な大集団や単身者は極力避け、また「町」は「市」、「県」の下位概念でなければ分類にならないので、この街づくりに苦労した。分類という性格から、「県」の数は一〇程度、同一「県」内での「市」は五つ程度、各「市」内での「町」数は十五程度以内、全体の「町」数を三百程度に抑えるという方針を立て、それぞれの「言葉」の収まりのいい場所を探すために「県・市・町」を何度も変えた。この割り振りを考えるだけで、瞬く間に半年が過ぎてしまった。

その結果、「県」として「水・陸水・海水・気象・環境・産業・生活・文化・名称」を選んだ。そして、たとえば「生活」県には、この「県」に相応しい「市」として「飲料・調理・洗浄・入浴・生理・雨具など・雨仕舞・その他」を当てた。また、「文化」県の「市」には「文化・行事・歴史・宗教・文芸・工芸・娯楽・譬えなど・その他」を当てた。他の「県」に属する「市」については、本書の目次を見ていただきたい。

また、「水汲み」のように複数の意味をもつ「言葉」は複数の「県」にまたがるので、主となる「県・市・町」を本籍に見立て、当初は「文化」県、「文芸」市、「茶道」町においていた。しかし、検討の過程で、「産業」県、「事業」市、「水仕事」町に移した。もちろん、「文化」県、「文芸」市にも住民票は残し、「水汲み」という言葉の全貌を見たい場合は、「水仕事」町を参照できるようにした。

本書の出版直前、出版社の提案を受け入れ、「水語」を「水の言葉」に変更した。そこで、本書は『水の言葉辞典』と命名された。収載された「水の言葉」には網羅性はない。見逃しもあろう。あえて割愛した言葉もある。「キッカケになる言葉」を提供したということでお許しを願いたい。なお、連想・発想を豊かにしていただくことを願って、常用されていない漢字もあえて多く用いた。その意をくんでいただきたい。

思えば、かの偉大なタレスが熟慮し抜いた結果、「すべてのモト（始め・起源・根源）は水だ」と言い切った。その「水」に関わる言葉を筆者が軽々しく分類するとは、不遜きわまりないことであった。まして、筆者が「水語」に命を吹き込むとは畏れ多いことである。

この先は、読者に「新しい言葉の発見」「新視点の発見」を期待したい。「こんな言葉もつくれるよ」と教えていただけるかもしれない。こうして読者・利用者が、それぞれの立場から『水の言葉』に「命」を吹き込んで下さることを心よりお願いしたい。

これまでお世話になった多くの方々のお顔が次々と目に浮かぶ。書籍を通して知り得た著者の数も、おびただしい。深甚のお礼を申し上げる。

最後に、本書が日の目を見ることができたのは、積極的に後押しを続けてくださった丸善の中村俊司さんのお蔭である。深く感謝申し上げる。

平成二十一年　麦秋

松井健一